

(2022. 01. 23.)

(P1) ネヘミヤの祈り(ネヘミヤ記1:11)

鮮于 攝

おはようございます。今月の第四週目の週日礼拝を、愛する兄弟姉妹と共に捧げられる喜びを与えて下さった、神様に感謝致します。この講壇に立たせて頂いたのは約一年ぶりですが、主の御前にみ言葉を持って立つことは、恐れと感謝を共に感じることであります。大変足りない者ですが、私が皆様と共にみ言葉を分かち会える機会は、年に一回です。それで、メッセージのテーマを決めるのに多くの時間を掛けました。その結果**ネヘミヤ記1:11**のみ言葉が与えられました。**ネヘミヤ記1章**は、父祖合わせて約140年間に渡って、故郷であるエルサレムに帰られる日を待ち望んでいた、ネヘミヤが捧げた祈りです。願わくは、今日のみ言葉を通して、様々な課題によって先が見えない暗闇の未来に走っているこの時代に、救われた私達そしてキリストの体である教会が、優先的にやるべきことは何であるかを、共に考えたいと思っております。

ネヘミヤが神様に捧げたの祈りは、**ネヘミヤ記**全体で9箇所ありますが、ここでは **1:11**をお読みます。

(P2) ” ああ、主よ。どうかこのしもべの祈りと、喜んであなたの名を恐れるあなたのしもべたちの祈りに耳を傾けて下さい。どうか今日、このしもべに幸いを見させ、この人の前で、あわれみを受けさせてくださいますように。そのとき、私は王の献酌官であった。”

ご存知の通りネヘミヤは、バビロン帝国の捕囚としてユダから捕まえられてきた、イスラエル人の子孫です。そして、ペルシア帝国のアルタクセルクセス王の前で、ぶどう酒を出す献酌官です。彼は珍しい地位について普通の人で、政治的な権限はほとんどありません。しかし、王に信頼されていたので大きな影響力がありました。そして、彼は神様のお導きでエルサレムに帰還してからは、ユダの総督になります。

ここで、皆様のご理解を深めるために、神の国を回復させるために神様から選ばれたアブラハムの子孫であるイスラエル民族の旧約聖書での歴史を、簡単にご紹介致します。

(P3) 始めに、**創造時代**ですが、神様は、自分の似姿に造られた人間の心に囚うことが、いつも悪に傾くのをご覧になって、主の御心にかなっていたノア家族以外の全ての人間を、洪水で裁かれます。それでも高慢な人間は、主の代わりに自分たちの名を上げようと、バベルの塔を建てます。これに対して神様は、人間の言葉を混乱させ、集まって生活していた人間を地の全面に散らさせます。そして、神様を信じていたアブラハムを主権的に呼び出し、神の国を回復させるために契約を一方的に結びます。これによってイスラエル民族は、アブラハム、イサク、ヤコブに繋がる**族長時代**に入ります。そして、神様の摂理の中でヤコブの家族はイスラエル民族として、約束の地であるカナンに入ります。しかしイスラエル民族は、神様からの律法に背いて、偶像崇拜のカナン人の風習に親しみ、約400年間に渡って12名の士師が支配する**士師時代**を迎えます。そして、アブラハムとの契約が結ばれてから、約1,000年が過ぎた時に、サウルとダビデ、ソロモンが国を治める**統一王**

国時代を迎えます。けれども、偶像崇拜の罪を犯し続けたイスラエル王国は、南ユダと北イスラエルに別れる、**分裂王国時代**に陥ります。その後も、神様に遣わされた数多くの預言者の警告にも拘わらず、北イスラエルはアッシリアに、南ユダはバビロンに滅ぼされ、約470年間に渡るイスラエル王国の歴史の幕が閉ざされます。これによって、イスラエル民族の一部はディアスポラになって、世界のあちこちを流浪する立場に落ちます。しかし、罪によって追い出された神の国を完全に回復させようとする、神様のご計画は、少しもはばかることなく、”**その日**”を目指して進みます。(P4)その結果、イスラエル民族はバビロン帝国に4回に渡って捕囚される**捕囚時代**と、ペルシア帝国のキュロスとアルタクセルクセス王によって、3回に渡ってエルサレムに戻る**捕囚帰還時代**を迎えます。

一方、イスラエル民族のこのような**捕囚帰還**は、二人の預言者を通して予告されたことが、成就された結果であります。(P5)イザヤ書44:28には、”**キュロスについては『彼は私の牧者。わたしの望むことをすべて成し遂げる』**と言う。エルサレムについては『**再建される。神殿はその基が据えられる』**”と記されています。

また、(P6)エレミヤ書29:10には、”**まことに、主はこう言われる。『バビロンに七十年が満ちるころ、わたしはあなたがたを顧み、あなたがたに、いつくしみの約束を果たして、あなたがたを、この場所に帰らせる。』**”と記されています。

今日の本文に戻りますが、先ほどお読みしたネヘミヤの祈りは、ネヘミヤの兄弟であるハナニからエルサレムの事情を聞いたときに捧げた祈りです。ネヘミヤは、ペルシア帝国の奴隷でしたが、エルサレムに対する愛情が誰よりも強いユダヤ人の子孫でもありました。それで、エルサレムに残っている人々の困難と恥辱の状況を、さらに、70年前に神殿が再建されたにも拘わらず、エルサレムの城壁が今だに廃墟であることを聞いた途端、ネヘミヤは祈りの行動に入りました。

この時の様子は、**ネヘミヤ記1:4**に、(P7)”**この言葉を聞いたとき、私は座り込んで泣き、数日の間嘆き悲しみ、断食して天の神の前に祈った**”と記されています。この様な、ネヘミヤの祈りの様子は、バビロン捕囚である、ユダヤ人の悲しみの歌である、**詩篇137篇**からも感じられます。その歌は、(P8)”**バビロンの川のほとり、そこに私たちは座り、シオンを思い出して泣いた。街中の柳の木々に、私たちは豎琴を掛けた。それは、私たちを捕らえて来た者たちが、そこで私たちに歌を求め、私たちに苦しめる者たちが、余興に、「シオンの歌を一つ歌え」と言ったからだ。どうして私たちが異国の地で、主の歌を歌えるだろうか。**

(P9)エルサレムよ、もしも、私があなたを忘れてしまうなら、この右手もその巧みさを忘れるがよい。もしも、私があなたを思い出さず、エルサレムを至上の喜びとしないなら、私の舌は上あごについてしまえばよい。”(詩篇137:1-6)という悲しみの歌です。

そうです、ネヘミヤの祈りの姿は、悔みと悲しみに包まれ自分の罪を悔い改めている祈禱者の姿、そのものであります。そしてこれは、エルサレムが陥落され捨てられているのは、イスラエルの罪に対する神様の裁きであると受けとめている、謙遜な心構えでもあります。

それでは、私たちの祈りの態度は如何でしょうか。もしも、愛する兄弟姉妹、あるいは生まれ育った祖国が危険に落ちた時に膝まずいて祈らないのであれば、その人は多分”隣人を自分の体のように愛しなさい“と言う戒めを実践していない人であるかも知りません。また、この様な時に祈らない信仰者は、祈る心をあらゆる手段を用いて妨害するサタンの仕業に屈服している人だと思われれます。しかし、ネヘミヤは愛する兄弟姉妹が大きな困難と恥辱の中にあることを聞いてから、約5ヶ月間祈りました。そして、その後、献酌官として王の前に出された時には、王からネヘミヤ記2:2の言葉を聞きました。それは、(P10)”すると、王は私に言った。「病気でさえなそうなのに、なぜ、そのように沈んだ顔をしているのか。きっと心に悲しみがあるに違いない。」”と言う言葉でした。

祈りは、日常の生活の中で神様の慈しみと公義を頂くために行われる、人間の生まれつきの行動であると思われれます。しかし、祈りは神様に対する絶対的な信頼と、自分自身の忍耐がなければ、決して易しい行動ではありません。それは、真実な信仰と勇気が伴われる祈りは、霊的及び肉体的な労働であり戦闘であるからです。さらに、場合によっては、神様からそれなりの応答を頂くまで、絶対に祈ることを止めないと言う凶々しさも必要な行動でもあるからです。特に、全能の父なる神様に選ばれて、祝福の契約を一方向的に結ばれると共に、律法への従順と不従順によって明らかな相反する答えを受けてきたイスラエル民族の場合に、祈りは、欠かせない日常の生活様式であったと思われれます。従って、聖書とは、人間がみ言葉に背いて犯した罪の、悔い改めの祈りに対する、神様の底知れない慈しみと公義のお答えが記されている、書物であると考えられれます。

今日のみ言葉に戻りますが、ネヘミヤの祈りは、(P11)5節で”ああ、天の神、主よ。大いなる恐るべき神よ。主を愛し、主の命令を守る者に対して、契約を守り、恵みを下さる方よ。”と始めています。これは、神様の宇宙的な能力と共に、イスラエルに対する神様の誠実さを強調するものであります。そしてこれは、申命記10:14-15に示されている(P12)”見よ。天と、もろもろの天と天、地とそこにあるすべてのものは、あなたの神、主のものである。主はただあなたの父祖たちを慕って、彼らを愛された。そのため彼らの後の子孫であるあなたがたを、あらゆる民の中から選ばれた。今日のとおりである。”と言う、み言葉から引き出された、心構えでもあります。さらにこれは、イスラエル人の信仰のポイントであり、申命記の思想でもあります。即ち、ネヘミヤは、この様な信仰の土台に立って、神様を褒めたたえながら自分の祈りに対する確実なお答えを期待して求めています。

そして、ネヘミヤの祈りは6節で、次のように罪を告白しています。(P13)”どうか、あなたの耳を傾け、あなたの目を開いて、このしもべの祈りを聞いてください。私は今、あなたのしもべイスラエルの子らのために、昼も夜も御前に祈り、私たちがあなたに対して犯した、イスラエルの子らの罪を告白しています。まことに、私も私の父の家も罪を犯しました。(ネヘミヤ記1:6)”これは、エルサレムの運命に対するネヘミヤの捉え方が、申命記的な解釈、即ち、み言葉に従順すると繁栄を、不従順すると苦難に落ち、世界に散らされると言う、モーセの戒めによるものであることを示しています。さらに、この祈りの中には、イスラエルの子らを捕囚した侵略者であるバビロンを、あるいは、敵か

ら救い出して下さらなかった、神様に対する非難はありません。つまり、これは、エルサレムを滅亡させた神様からの裁きは、公義であることを認識している心構えでもあります

また、ネヘミヤより先立ってバビロン帝国の捕囚であった、預言者ダニエルが捧げた祈りでは、(P14) ” 私たちは罪ある者で不義をなし、悪を行って逆らい、あなたの命令と定めから外れました。私たちはまた、あなたのしもべである預言者たちが、御名によって私たちの王たち、首長たち、先祖たち、民衆すべてに語ったことばに、聞き従いませんでした。(ダニエル書9:5-6) ” と告白しています。

そして、律法学者であるエズラは指導者として、次のように悔い改めの執り成しの祈りを捧げました。(P15) それはエズラ記9:7に記されているみ言葉であります。即ち、 ” 私たちの先祖の時代から今日まで、私たちは大きな罪過の中にありました。私たちのその咎のため、私たちや、私たちの王、祭司たちは、諸国の王たちの手に渡され、剣にかけられ、捕虜にされ、かすめ奪われ、面目を失って、今日あるとおりで。 ” とこれまでの、イスラエル民族が犯してきた罪を告白しながら、神様からの慈しみと公義を切に求めています。

ここで、十字架の贖いによって救われた私たちのこれまでの祈りを振り返って見ましょう。もしも、思いもしなかった突然の苦難にさらされた時、私たちはどの様な反応を示して来たでしょうか。恐らく多くの人々は、どの様な理由で真面目な私に、愛する家族に、あの人々に、この様な苦難が訪れたかを探ることで、夢中になったことはありませんか。そして、このような愚かな行動によって、祈るべき時間と熱情を失ったことはありませんか。さらに、大切な事である、神様への真実さと信頼さを失い、み言葉から、聖徒の交わりから、その上教会の奉仕から離れて、寂しさを感じたことはなかったでしょうか。もしも、私たちにこの様な行動があったのなら、それは、私たちが神様に近づくことを妨げるサタンの仕業に、脅しめられたこととなります。

ご存知のように、神様が被造物である私たちを通して、栄光を受けようとされるのは、創造の目的であります。従って、私たち信仰者は、どの様な環境に置かれても神様への栄光のために、ただ感謝と喜びを持って慈しみと公義を期待して絶えず祈るべきであると思われれます。それは、聖書には、私たちがこの様な信仰者の態度を取らなければならない根拠が、数多く記されているからです。その中の一つが詩篇121篇です。これは、信仰者たちが礼拝を捧げるために、エルサレムの神殿を向けて都を登る時に歌った、信仰の告白であります。

(P16) ” 私は山に向かって目を上げる。私の助けはどこから来るのか。私の助けは主から来る。天地を造られたお方から。主はあなたの足をよろけさせず あなたを守る方はまどろむこともない。見よイスラエルを守る方はまどろむこともなく眠ることもない。

(P17) 主はあなたを守る方。主はあなたの右手をおおう陰。昼も日があなたを打つことはなく、夜も月があなたを打つことはない。主はすべてのわざわいからあなたを守り、あなたのたましいを守られる。主はあなたを 行くにも帰るにも 今よりとこしえまでも守られる。(詩篇121篇) ” この様なみ言葉は、様々な問題を抱えて神様からのお答えを求めて祈っている、私たちの様な弱い信仰者に大きな慰めと希望を与えて下さいます。

一方、ネヘミヤの祈りは8節で方向を変えて、しもべモーセに命じた言葉を思い起こして下さいと、願っております。ここでモーセに命じた言葉とは、8節の後半と9節に記されているように、”神に対する信頼を裏切るなら、あなたがたを諸国の民の間に散らす、しかし神に立ち返り、命令を守り行うなら、諸国から集めて、選んだ場所に連れて来る”と言う、み言葉です。これはまさに、神様のイスラエル子らに対する、審判と回復、即ち、公義と慈しみのパターンを、エルサレムからの追放と、バビロンからの捕囚帰還に置き換えた祈りであります。そしてこれは、神様がイスラエルと、諸国に宣言された、エレミヤ書31:10に記されているみ言葉、即ち、(P18)”諸国の民よ、主のことばを聞け。遠くの島々に告げ知らせよ。「イスラエルを散らした方がこれを集め。牧者が群れを飼うように、これを守られる」と。”そして、エレミヤ書31:28に記されている、(P19)”かつてわたしが、引き抜き、内倒し、打ち壊し、滅ぼし、わざわいを下そうと彼らを見張っていたように、今度は、彼らを建て直し、また植えるために見張る。”と言うみ言葉から、生み出された祈りでもあります。

ヘブル語で書かれた聖書には、人間に対しては全く使われず神様にだけ使われている、二つの単語があると言われていています。それは、慈しみと公義であります。慈しみと公義は、神様が持っていらっしゃるアイデンティティーの中の一つでもありますが、聖書の中には数多く記されています。その中の一つが出エジプト記32章のみ言葉であります。即ち、神様から律法を頂くためにシナイ山に登ったモーセを待ち切れずに、人間が造った金の子牛に礼拝するイスラエル子らの、罪の許しを求めて捧げる、モーセの執り成しの祈りに対する、神様の慈しみの施しです。

また本文に戻りますが、10節でネヘミヤは、神様の慈しみと公義を待ち望んでいる者たちが、すなわち困難と恥辱の中にある、エルサレムに残された者たちであることを、訴えています。さらに、これらの者たちは、偉大な力強い御手をもって贖い出された、あなたのしもべ、あなたの民であることを、主張しています。そして、最後に11節では、(P20)”ああ、主よ。どうか、このしもべの祈りと、喜んであなたの名を恐れる、あなたのしもべたちの祈りに、耳を傾けて下さい。どうか今日、このしもべに幸いを見させ、この人の前で、あわれみを受けさせてくださいますように。そのとき、私は王の献酌官であった。”と記されています。神様のお名前の前に”ああ”と言う表現を付けるのは、緊急事態にお願いをする、祈禱者の切なさを言い表すものと、解釈されています。また、神様が約束なさった通りに、慈しみと公義によって助けて下さることを信じている、祈禱者の心を表わすものでもあります。さらにネヘミヤは、この願いは、自分だけではなく、神のみ名を恐れている、イスラエル共同体の祈りであることを、訴えています。

即ち、ネヘミヤの祈りのポイントは、神様の心にこのことを集中させて、神様が永遠に持っていらっしゃる御力が現れることによって、被造物である私たちから神様が栄光を受け取られることにあると考えられます。この様にネヘミヤが捧げた祈りは、全能の神様に向かって求めることであり、探すことであり、また、たたく行動でありました。

イエス様は、(P21)マタイの福音書7章の山上垂訓の中で、”求めなさい。そうすれば与えられます。探しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれても、求める者は受け、探す者は見出し、たたく者には開かれます。”(マタイの福音書7:7-8)」と応えられる祈りの秘訣を、教えて下さいました。

また、ルカの福音書18章では、神を恐れず人を人とも思わない裁判長の前にひっきりなしにやって来て、「私を訴える人をさばいて、私を守ってください」と叫んでいる、やもめの例え話しをされました。これはイエス様が、昼も夜も自分に叫び求めている、私たちの様な弱い人間の祈りを、いつまでも放っておかないことを約束して下さいました。

話は変わりますが、(P22)土浦めぐみ教会では「祈って支える奉仕」のための祈禱課題が、2ヶ月に1回出されています。これは、愛の信仰共同体である教会が、皆さんのお祈りによって支えられているしるしです。一方、2年前からは、牧会スタッフと役員の皆さんが、毎日交代で断食連鎖祈禱を行いました。私は2020年9月から仲間に入れさせてから、37回祈ることができ、愛の信仰共同体の一人としての幸いを感じる事が出来ました。正直に告白しますと、毎回、断食のことが負担になりました。しかし、大変恐縮な話ですが、振り返って見ると、神様に対する、また教会に対する、何よりも共に愛され、共に仕えられている教会員に対する、信仰者としての基本的な責任をわずかではあります。果たしていたと思われま

今日、2022年の第四週目の週日を迎えています。世界は相変わらず、先の見えない暗闇の中にあります。それで、世界の人々は地球の未来に対して様々な恐れを感じています。このような時代が到来したのは、物質的な豊かさだけを求めてきた、底知れない人間の傲慢さの結果であると思われま

救われた私たちの、神様に対する本当の奉仕は、二つあると言われていています。一つは、慈しみと公義の神様と語り合うこと、即ち、祈ることです。そしてもう一つは、順境の時にも逆境の時にも、神様の慈しみと公義を信頼し続けて共に歩むことです。

天の神様は愛です。愛されている私たちの心に愛がないと、祈りは心の底から出てきません。だから、神様に愛されている人が祈らなければ、御霊ご自身が言葉にならないうめきをもって執り成して下さいます。ご存知のように今年、土浦めぐみ教会が神様から頂いた聖句が、「互いに熱心に愛し合いなさい」です。願わくは、互いに熱心に愛し合うことによって、私たちの家庭に、隣人に、教会に、そして地域社会に、神様の栄光が豊かに現れますように、力合わせて365日、執り成しのお祈りを捧げましょう。